津山朝日新聞
夕刊
津山朝日新聞社
岡山県津山市田町13
電話0868－22－3135

# 「私大はいばらの道」

## 日本私大協 学術協議会　鵜﨑学長（美作大短大部）講演

日本私立大学協会の教育学術協議会が東京都内で開かれ、美作大学・同短期大学部の鵜﨑実学長が「地方私立大学の将来を考える」と題して講演した。「私学として生き続けるのはいばらの道」と語り、人口減少が進む中、公立化などの選択肢しか残されていない社会の現状を危惧した。

経営の安定化や新学科設置、定員増が見込める私立大の公立化は全国で加速していると指摘。同大学では、自宅通学圏内の入学者約100人はほぼ地元に就職しているとし、「多くの地方私大が人材養成の面で公的役割を担っているが、国公立大に比べて公財政の投入額が少なく、設備や研究費にも差が出る。官尊民卑の下で展望を見いだすのは難しい」と語った。

国公私の枠組みを超えた連携を目指し、文科省が再編案として検討している「大学等推進法人・地域大学ネットワーク機構」にも言及。「それぞれの強みを生かし、人材育成と産業発展に努めるという掛け声は魅力だが、国庫補助が均等に扱われるかが焦点。格差温存の高等教育を継承してはならない」と懸念を示した。

18歳人口が少ない地域にある大学の定員確保に向けては「自宅通学圏の進学者でまかなうのは不可能で、他県からも集めるのが宿命」と強調。美作大学では、国試合格率100％などを達成する教育力、Uターン就職の実現などの実績が充足を後押ししているとし、「国公立大にできない学生の面倒見の良さを売りにしている」と話した。

同協議会には全国の大学長や理事長ら約200人が出席した。

私立大学協会の協議会で講演する鵜﨑学長

## 取材雑感

# 課題を直視すべき時期

鵜﨑学長の講演の中で「かろうじて生き残っている」という言葉が印象に残る。18歳人口が少ない立地にありながら定員充足に成功している希有な地方私立大だが、語った本音には将来への危機感がにじむ。われわれ地域住民も、抱える課題を直視すべき時期を迎えたのではないか。

美作大学は現在、入学定員約350人のうち約100人が美作地域出身者（津山市は80人弱）。地域内の大学・短大進学者数は500人ほどであり、2割以上を見込むのは難しいという。国公立大の類似学科に勝る国試合格率や地元での就職を実現するといった実績により、圏外・県外出身者で充足する歯車は上手く回っている。

ただ、将来像を考える上で全国の大学を取り巻く環境に着目してみると、厳しい状況を迎えるのは避けられないと思われる。

近年では、高知工科大（高知）や長岡造形大（新潟）、静岡文化芸術大（静岡）などの公立化した旧私大に加えて、変革に向けた水面下の動きも増えているという。国立大の定員が減らない一方で公立大の定員は増加に転じ、入学料や授業料が比較的高額な地方私大の定員確保は、ますます難しくなる。

そうなれば、少子化の波も受けて学生の奪い合いは激化するだろう。人口が密集した県庁所在地周辺などでは淘汰（とうた）をかけた競争を繰り広げ、中山間地では特色がない限り生き残る道は少なくなる。

「私立」という枠を外して、ここにある唯一の大学と見るべきかもしれない。存続できなくなれば、地域の疲弊が加速するのは間違いない。美作大学が抱える課題は、我々が暮らしている津山の問題とも捉えられる。

学生1人当たりの公財政支出が私立大と国立大で約13倍も差があるという現実も気がかりだ。

地方私大は高等教育の下支えの役割を担っているといわれ、美作大では、毎年約100人が津山圏域に就職していて地域の求人に応えているといえる。それに加え、在学する1000人以上の学生が経済をどれだけ支えているかにも目を向ける必要がある。多くの店がバイトを学生でまかなっているし、消費の面でも貢献は大きいはずだ。